

<資料>

キャリア教育における人間関係形成能力を高める指導・援助

—コミュニケーションスキルを中心として—

跡見学園女子大学
山口 豊 一

神栖市立神栖第一中学校
長 峰 正 道

The guidance and assistance for building up the human relations competence in career education, with particular reference to communication skill

ATOMI UNIVERSITY
Toyokazu YAMAGUCHI

KAMISU municipal KAMISU DAIICHI Junior High School
Nagamine MASAMICHI

概要

本研究の目的は、キャリア教育における人間関係形成能力を高める指導・援助の在り方を明らかにすることである。中学校第2学年28名に対して、キャリア教育における人間関係形成能力を高める指導・援助として、コミュニケーションスキルを育てるためのスキルトレーニング（授業）を実施した。その際、友人との会話作成のワークシートを活用した。

その結果、スキルトレーニングはコミュニケーションスキルを高めるのに効果があることが確認された。特に、「友人の話を相手の身になって聴くことができる」や「友人に自分の考えや意見を伝えたいときにどのようにすればよいか分かる」などのコミュニケーションスキルを高めるのに効果的であることが明らかになった。また、スキルトレーニング経験者の方がより定着することが示唆された。さらに、ワークシートを活用することで、意見や考えをまとめることの苦手な生徒も活動しやすくなることが確認された。

KEY WORDS：キャリア教育，スキルトレーニング，人間関係形成能力，コミュニケーションスキル，ワークシート

The object of this study is to clarify how the guidance and assistance should be made for raising the human relations competence in career education. Skill training in communication skill was conducted to the 28 junior high second graders as a part of the guidance and assistance to enhance the human relations competence in career education in class activities. In this training the worksheet which aims at making a conversation with friends was used.

As a result the skill training proved to be effective in raising communication skill. It especially enabled students to “listen to friends’ opinions from their perspectives” and also to “express views and opinions effectively to friends.” It is also confirmed that those who had skill training had consistently better results. Furthermore, by using the worksheet, those who had not been good at compiling their opinions and views could do so more easily.

Key words : career education, skill training, competence in human relations, communication skill, worksheet

1 問題と目的

今日、少子高齢化社会が到来し、産業・経済の構造的変化や採用・雇用の多様化・流動化等が進み、児童生徒たちの進路をめぐる環境が大きく変化している。全国的にニートやフリーターが増え続けており、2003年には15才～34才までの労働人口のうちフリーターは217万人にも及んでいる（文部科学省、2005,以下、文科省）。また、上級学校への無目的入学・不本意入学、中途退学や怠学等の学校不適応が増加するとともに、就職後の離転職が増えるなど、学ぶこと・働くことへの意欲や態度、職業観・勤労観が低くなっていることが課題として指摘されている（国立教育政策研究所生徒指導研究センター、2002）。

これらの課題を踏まえ、「キャリア教育の推進に関する総合的な調査研究協力者会議報告書」（文科省、2004）では、「児童生徒一人一人のキャリア発達を支援し、それぞれにふさわしいキャリア（協力者会議では、キャリアを『個々人が生涯にわたって遂行する様々な立場や役割の連鎖及びその過程における自己と働くこととの関係付けや価値付けの累積』としている。）を形成していくために必要な意欲・態度や能力を育てる教育、端的には、児童生徒一人一人の勤労観・職業観を育てる教育」であるキャリア教育の必要性を示している。そして、中学校だけでなく、小学校から高等学校まで組織的・系統的な指導が求められている。その際、これまでの進路指導を中心とするような取り組みだけではなく、各教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間などの学校教育すべてを通して実施していくことが必要である（文科省、2004）。

また、同報告書では、国立教育政策研究所生徒指導センター（2002）で開発された「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み」の例を提示している。その中には、職業観・勤労観を身に付けるために必要な具体的な能力として、「人間関係形成能力」「情報活用能力」「将来設計能力」「意志決定能力」の4つの能力領域が示されている。学校教育全体でこれらの能力を高めるための指導・援助をしていくことが重要となってくると考えられる。

さらに、若者の勤労観・職業観をはじめ、コミュニケーションスキル（能力）や対人関係スキル（能力）、基本的マナー等、職業人としての基本的資質・スキル（能力）の低下を指摘する声は、これまでに大きく厳しいものであり、高卒採用者に対するコミュニケーションスキルに雇用者の40%近くが「不満・やや不満」としている（文科省、2004）。「生きる力」の育成の観点を踏まえる。基礎・基本を確実に身に付けさせ、豊かな人間性や社会性、学ぶことや働くことへの関心や意欲、進んで課題を見つけてそれを追求していく力を養う。そして、集団生活に必要な規範意識やマナー、人間関係を築く力やコミュニケーションスキルなど、幅広い能力の形成を図る。キャリア教育においては、以上の視点を踏まえて支援していくことを、これまで以上に重視していく必要がある。

また、『キャリア教育の視点を生かした進路指導の工夫・改善に関する参考資料』（栃木県総合教育センター、2006）の中では、「人間関係形成能力は様々な能力や態度の育成に関わるもの」としており、具体的には「コミュニケーション能力をはじめとして、よりよい人間関係を築くための資質や能力は、社会人あるいは職業人として生きていくための基盤となるもの」としている。結局、コミュニケーションスキル（能力）を始めとする人間関係形成能力の育成が強く求められているのである。

ところで、本学級における生活実態調査（図1）では、質問1「友だちとの会話の中で、嫌な思いをしたことがある。」また、質問2「友だちとの会話の中で、嫌な思いをさせたことがある。」に対して、半数近くの生徒が「よくあてはまる」「どちらかというにあてはまる」と回答している。また、質問3「相手に何か

頼まれたが、断りたい。相手に不愉快な思いをさせない断り方を知っている。」に対して、生徒の30%程度が「全くあてはまらない」「どちらかというにあてはまらない」と回答している。これまでの生徒の日常生活での発言や実態調査などから、本学級の生徒は会話をするという力については概ね身に付けていると考えられる。しかし、会話の最中に相手に嫌な思いをさせたり、頼まれたことを断りたい場面で上手に断れなかったりすることが多いのではないかと考えられる。

これらのことから、「人間関係形成能力」を高めていく必要があると考えた。「キャリア教育推進の手引き」(文科省, 2006)では、「人間関係形成能力」を、表1のように「自他の理解能力」と「コミュニケーション能力」の2つに分けている。

前述のように本学級では、人とコミュニケーションをうまく取れない生徒がいる。そこで、本研究では、「コミュニケーションスキル」を中心に、キャリア教育における人間関係形成能力を高める指導・援助の在り方を明らかにすることを目的とする。

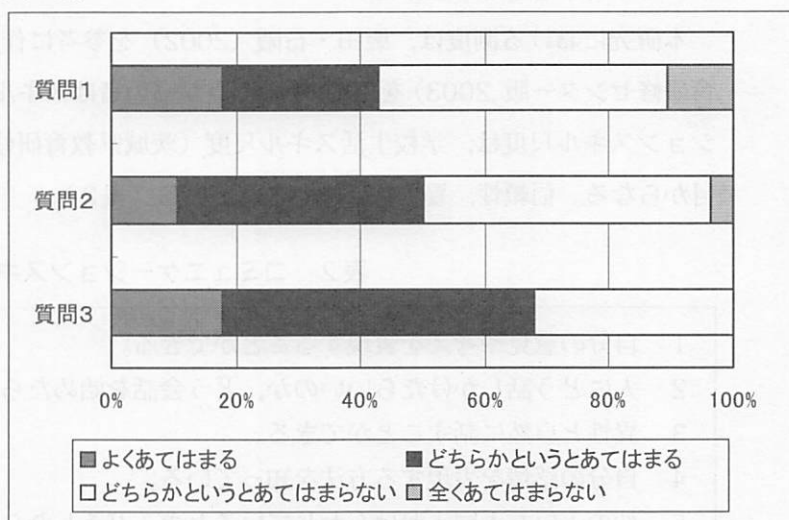


図1 生活実態調査

(2007年12月3日調査 男子17名, 女子11名)

表1 キャリア発達にかかわる諸能力(「キャリア教育推進の手引き」(文科省, 2006)より)

領域	領域説明	能力説明
人間関係能力	他者の個性を尊重し、自己の個性を發揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む。	<p>【自他の理解能力】</p> <p>自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にしていく能力</p> <p>【コミュニケーション能力】</p> <p>多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力</p>

2 研究の内容

(1) 基本的な考え方

① コミュニケーションスキル

本研究におけるコミュニケーションスキルとは「多様な集団や組織の中で自他の立場を理解し、豊かな人間関係を築きながら、自己成長を目指す能力としてのソーシャルスキル」と定義する。

② 友人との会話を作り上げる力と測度

飯田・石隈(2002)は、学校心理学の援助領域である学習面、心理・社会面、進路面、健康面という枠組みを用いて、中学生が学校生活を送る上で出会う発達課題・教育課題の解決を促進するスキ

ルを学校生活スキルとし、それを自己学習スキル、進路決定スキル、集団活動スキル、健康維持スキル、コミュニケーションスキルに分類している。

本研究は、トラブルの少ない人間関係を保ったり、精神的健康を保ったりする上で必要なスキルや対人関係についての考え方・進め方に関連したスキルなど社会面でのスキルである、コミュニケーションスキルを中心に取り上げる。

本研究における測度は、飯田・石隈（2002）を参考に作成された学校生活スキル尺度（茨城県教育研修センター版,2003）を用い、その得点が高い者はスキルが高いということにする。コミュニケーションスキル尺度は、学校生活スキル尺度（茨城県教育研修センター版,2003）の下位尺度であり、7項目からなる。信頼性、妥当性は検討されている（表2）。

表2 コミュニケーションスキルの尺度項目

1	自分の意見や考えを表現することができる。
2	人にどう話しかけたらいいのか、どう会話を始めたらいいのか知っている。
3	異性と自然に話すことができる。
4	自分の感情を表現する方法を知っている。
5	仲のよい友人同士がけんかしているとき、どうしたらいいのか知っている。
6	友人の話を相手の身になって聞くことができる。
7	自分の嫌なことを断ることができる。

③ ワークシートの活用

これまでも学級活動や道徳の授業の中で、相手の立場になって物事を考えたり、話の内容を考えたりすることはあったが、相手をもっと話したいと思うかどうかについて考えることは少なかった。また、意見の食い違った相手に対して、説得しようとする会話はあっても互いに納得する会話の方法を学ぶことも少なかった。これらのことから、友人と気持ちのよい会話をするために、友人との会話を作り上げる力を伸ばすスキルを身に付けることのできる活動が必要だと考えた。その際、会話を振り返ることができるワークシートを活用しようと考えた。

設定された状況から、気持ちのよい会話を作り上げていくためには、自分のこれまでの発言を覚えておく必要がある。記録無しでこれを行うことは困難だと考えられるので、振り返りのための記録ができるようにしておく。そうすることで、よりよい応答を考えることもできるとともに、自分の応答によって相手はどのように話を進めていくか考えを深めることができると考えられる。また、完成したシナリオを基にして発表することで、声のトーンや表情等の非言語も会話の中に含まれていることに気づき、その大切さについての理解が深まると考えられる。

(2) 授業研究

① 単元名 学級活動「友だちと気持ちのよい会話をしよう」

② 目標

友人と気持ちのよい会話をするために必要なコミュニケーションと対人関係の考え方・進め方につ

いて知り、実行できるようにする。

- 主な尺度項目
- ・自分の意見や考えを表現することができる。(尺度項目1)
 - ・自分の嫌なことを断ることができる。(尺度項目7)

③ 指導計画

トレーナー・・・学級担任 補助者・・・ゲストティーチャー (副担任)

短学級活動 事前アンケート調査「コミュニケーションスキル」

学級活動 スキルトレーニング

「コミュニケーションの方法」

短学級活動 事後アンケート調査「コミュニケーションスキル」

④ 展開

	トレーニングの内容・活動	トレーナーの働きかけ及び配慮事項
導入	1 本時のねらいを知る。 2 コミュニケーションについて確認する。	<ul style="list-style-type: none"> ・本時のスキルトレーニングのねらいを説明する。 ・言葉だけでなく、身体表現も使ってメッセージをやりとりすることであり、人と人との関わりに重要なものだと確認する。 ・自分も相手も大切にすることをコミュニケーションの会話のよさを確認する。
展開	3 デモンストレーションを見る。 ・「相手を傷つける会話」「自分を傷つける会話」「自分も相手も大切にすることを会話」を見る。 ・デモンストレーションを見て感じたことを発表する。 4 グループディスカッション ・教室掃除の当番だが、先生に頼まれて廊下の床をみがいていたら、A君から「教室掃除をやって欲しい。」と言われた。 ・テスト前の土曜日、家で勉強を始めたところに、Bさんから「映画に行こうよ。」と誘われた。	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の伝えたいことを話す権利と相手を傷つけない義務について触れながら、3種類のコミュニケーションがあることを解説する。 ・グループで与えられた設定での2人の会話のシナリオを考えるように伝え、その際、自分も相手も大切にすることをコミュニケーションでの関わりになるように伝える。
まとめ	5 シェアリング 6 まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ・トレーニングの感想を書くように指示する。 ・スキルを身に付けるためには実行することが重要であることを伝える。

3 結果と考察

(1) 生徒の感想

学級担任とゲストティーチャーとで行った「相手を傷つける会話」、「自分を傷つける会話」、「自分も相手も大切にすることを会話」をデモンストレーションで見ることによって、「自分も相手も大切にすることを会話」が適切な会話であることを多くの生徒が実感していた。与えられた設定で考えたシナリオでは、自分が置かれた状況を話すだけでなく、どのような方法であれば自分も相手も傷つかない、最適な方法であるかを考えていた。これは、3種類の会話を比較したり、身近な場面を設定したりすることで、より効果が大きかったと考えられる。

生徒たちは、「自分も相手も大切にできる会話」を今後の生活でしていこうという、より良いコミュニケーション意識に関する感想を書いていた（表3）。

表3 トレーニングを終えての感想（2007年12月21日 実施）

<ul style="list-style-type: none">・自分も相手も傷つけないで断るには、相手の気持ちも分かってあげないといけないし、自分のことも考えなければいけないので難しいと思った。・自分も相手も大切にできる会話をするために、一つ一つの言葉を考えなくてはならないと思った。言葉一つでイメージが変わるのですごいと思った。・自分が発した一言で相手の気持ちを変えてしまうから、しっかりと考えてから相手に伝えなくてはならないと思った。・この授業を通して、きちんとした会話や断り方を学びました。今まで自分が人に対して「ちょっときつく言い過ぎたかな」「傷ついていたかも」など自分の言葉を反省することができました。・コミュニケーションをとるとき、相手のことを考えることも大切だけど、自分のことを考えることも大切だと思った。・話し方が変わることによって、自分の状況や相手の状況が変わることが分かった。・相手に何て言えば自分が無理することなく、そして相手を傷つけずに話すことができるかを学ぶことができた。・人がやっていると感じるけど、自分がやっているときは気づかないので、すごくいい勉強になった。

(2) 学級全体の生徒の変容

① 行動面から

日常生活の様子を観察していると、自分の意見を述べるとともに、相手の意見を確実に聞き、より良い活動ができるように判断し、適切でなかった意見をバランスをとることに注意しながらコミュニケーションを取っている様子が見られる。さらに、これまで相手に不快な言い方をすることの多かった生徒が、そう思われないようなコミュニケーションを心掛けている様子が幾度か見られるようになった。

② プレ・ポストテストの調査から

プレテスト・ポストテストは、4件法で調査された（まったくあてはまらない1、あてはまらない2、あてはまる3、とてもあてはまる4）。

ア 全体的な傾向

スキルトレーニングの事前と事後に、コミュニケーションスキル測定尺度で、自己評価による質問紙調査を実施した（表4）。

すべての項目で、事後の方が上回っている。特に、項目4「自分の感情を表現する方法を知っている。」、項目7「自分の嫌なことを断ることができる。」が大きく上昇している。これは、デモンストレーションで3種類のコミュニケーションがあることを知るとともに、自分も相手も大切にできる会話が適切な会話であるということを理解したためだと考えられる。

また、項目1「自分の意見や考えを表現することができる。」が上昇しているのは、シナリオ作

表4 コミュニケーションスキルの平均得点の事前・事後の比較

コミュニケーションスキル	事前	事後	t 値
1 自分の意見や考えを表現することができる。	2.86	3.14	-2.56 *
2 人にどう話しかけたらいいのか、どう会話を始めた らいいのか知っている。	2.96	3.14	-1.07
3 異性と自然に話すことができる。	2.93	3.11	-1.76
4 自分の感情を表現する方法を知っている。	2.75	3.11	-4.12 **
5 仲のよい友人同士がけんかしているとき、どうした らいいのか知っている。	3.00	3.29	-1.92
6 友人の話を相手の身になって聞くことができる。	3.04	3.32	-2.41 *
7 自分の嫌なことを断ることができる。	3.04	3.40	-2.72 *
合 計	2.94	3.21	-3.26 **

(事前 2007年12月3日, 事後 12月21日実施, 男17名, 女11名) *p<.05 **p<.01

成の場面設定が身近な問題であったため、自分のことと捉えてトレーニングに取り組めたこと、その中で自分の意見や考え、感情を相手に分かりやすく伝えることができたことが要因であると考えられる。さらに、自分の話を聴いてもらうためには、相手の話を否定することなくきちんと聴くことが大切だということの理解を深めたためだと考えられる。

事後に行った生活実態調査では(図2)、質問1「友だちとの会話の中で、嫌な思いをしたことがある。」また、質問2「友だちとの会話の中で、嫌な思いをさせたことがある。」に対して、事前の調査と比べて、「全くあてはまらない」「どちらかというにあてはまらない」と回答している生徒の割合が増加した。また、質問3「相手に何か頼まれたが、断りたい。相手に不愉快な思いをさせない断り方を知っている。」に対して、80%以上の生徒が肯定的な回答をしている。このことから、スキルトレーニングの成果が日常生活にも生かされるようになったと考えられる。

イ トレーニング経験者と未経験者との比較

トレーニング経験者(男6名, 女4名, 計10名)、トレーニング未経験者(男11名, 女7名, 計18名)であった。

全体では、経験者事前(3.19)であり、未経験者事前が(2.80)であった(表5)。t検定の結果($t=-2.12, p<.05$)であり、経験者の方が有意に得点が高かった。また経験者事後が(3.29)であり、未経験者事後が(3.17)であった。t検定の結果($t=-0.70$)であり、経験者と未経験者の統計的な差はなかった。さらに、経験者事前が(3.19)であり、経験者事後が(3.29)であった。t検定の結果($t=-2.33, p<.05$)であり、事後の方が有意に得点が高かった。また未経験者事前が(2.80)であり、未経験者事後が(3.17)で

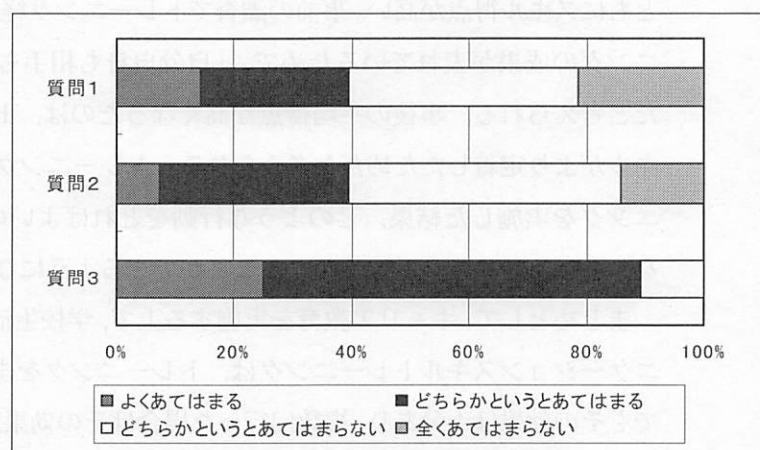


図2 生活実態調査(2007年12月21日 男子17名, 女子11名)

あった。t検定の結果 ($t=-2.98, p<.01$) であり、事後の方が有意に得点が高かった。

表5 トレーニング経験者と未経験者のコミュニケーションスキルの全体の平均得点

	全 体		
	経 験	未 経 験	t 値
事 前	3.19	2.80	-2.12*
事 後	3.29	3.17	-0.70
t 値	-2.33*	-2.98**	

* $p<.05$ ** $p<.01$

さらに、項目毎に見てみる。今回、トレーニングを実施した生徒のスキル得点がすべての項目で同じ、あるいは伸びている (表6)。コミュニケーションスキルの育成に、スキルトレーニングが有効であることが示唆された。

表6 配慮を要する生徒A男とB子のスキル得点 (事前2007年12月3日, 事後12月21日実施)

	項目1		項目2		項目3		項目4		項目5		項目6		項目7	
	経 験	未 経 験	経 験	未 経 験	経 験	未 経 験	経 験	未 経 験	経 験	未 経 験	経 験	未 経 験	経 験	未 経 験
事前	3.00	2.78	3.10	2.89	3.20	2.78	3.00	2.61	3.30	2.83	3.30	2.89	3.40	2.83
事後	3.30	3.06	3.20	3.11	3.20	3.06	3.10	3.11	3.30	3.28	3.30	3.31	3.60	3.22

しかも、伸び幅に関しては、初めてトレーニングを実施した生徒の方が大きい。これは、トレーニングによって「友だちと気持ちのよい会話」をするスキルが高まったことと、それを行う自信がついたためだと考えられる。

しかし、このスキルトレーニングを実施したことのある生徒の方が、すべての項目で事前・事後ともにスキル得点が高い。事前の調査でトレーニング経験者のスキル得点が高いのは、以前のトレーニングの成果が表れているため、「自分自身も相手も傷つけない会話」をしようとしているためだと考えられる。事後の平均得点が高くなったのは、トレーニングを複数回行ったために、そのスキルがより定着したためだと考えられる。トレーニングの内容を忘れていたとしても、再度、トレーニングを実施した結果、どのような行動をとればよいのか思い出すことで、「自分も相手も傷つけない会話」を意識した行動をとることができるようになったのではないかと考えられる。

まとめとして、キャリア教育を実施する上で、学校生活スキルトレーニングは有効である。コミュニケーションスキルトレーニングは、トレーニングをまったく行わない場合よりも、一回行うだけでもその効果は十分あり、複数回行った場合はその効果が増すと見える。つまり、コミュニケーションスキルをより定着させるためには、トレーニングを複数回行うことの有効性が示唆された。

4 今後の課題

本研究の目的は、「コミュニケーションスキル」を中心に、キャリア教育における人間関係形成能力を高

める指導・援助の在り方を明らかにすることであった。

研究の結果、スキルトレーニングは複数回実施するのが効果的であることが明らかになった。つまり、系統的、継続的指導が効果的であることが示唆された。

以下の2点を今後の課題とし、研究の指針とする。

- (1) 人間関係能力の2つの側面である「自他の理解能力」「コミュニケーション能力」を高めるプログラムのカリキュラムへの位置付けを検討する必要がある。
- (2) キャリア教育に関わる「情報活用能力」「将来設計能力」「意思決定能力」を高めるための効果的なスキルトレーニングプログラムの開発が必要である。

引用文献

- 茨城県教育研修センター 2003 「教育相談に関する研究 学校生活適応のための指導・援助の在り方」
茨城県教育研修センター教育相談課報告書
- 飯田順子・石隈利紀 2002 「中学生の学校生活スキルに関する研究—学校生活尺度（中学生版）の開発」
教育心理学研究 50, 225 – 236
- 国立教育政策研究所生徒指導研究センター 2002 「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について」
- 文部科学省 2004 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」
- 文部科学省 2005 「キャリア教育の推進に向けて」
- 文部科学省 2006 「キャリア教育推進の手引き」
- 栃木県総合教育センター 2006 「キャリア教育の視点を生かした進路指導の工夫・改善に関する資料
（中学校・高等学校編）」